

こころ育てる絵本との出会い

マクちゃん通信

2016 2 - 3 vol. **36**

絵本原画展

tupera tupera

特集 字のない絵本



ツペラ ツペラ tupera tupera



PHOTO/RYUMON KAGIOKA

tupera tupera (ツペラ ツペラ) プロフィール

亀山達矢と中川敦子によるユニット。絵本やイラスト、工作、ワークショップ、舞台美術、アニメーション、雑貨など、様々な分野で幅広く活動している。

『かおノート』(コクヨS&T)、『やさいさん』(学研)、『うんこしりとり』(白泉社)など、著書多数。海外でも様々な国で翻訳出版されている。NHK Eテレの工作番組「ノージーのひらめき工房」のアートディレクションも担当。絵本『しろくまのパンツ』(ブロンズ新社)で第18回日本絵本賞読者賞、Prix Du Livre Jeunesse Marseille 2014(マルセイユ 子どもの本大賞 2014)グランプリ、『パンダ銭湯』(絵本館)で第3回街の本屋が選んだ絵本大賞グランプリを受賞。京都造形芸術大学 こども芸術学科 客員教授

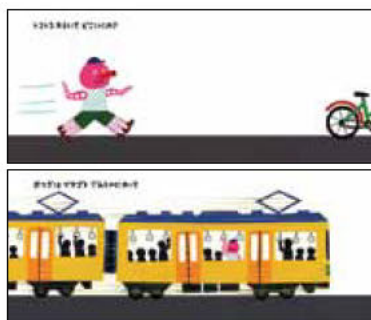
<http://www.tupera-tupera.com/>

絵本を通して、新しい世界が広がり、
いろいろな出会いや、
たくさんの笑顔が生まれたら嬉しい。

絵本原画展開催

平成28年2月6日(土)～3月30日(水)

『タ「さん」ト「はん」くの?』
(絵本館)
海からあがったタコさんが、トコトコ、チリンチリン、ブルルンブルン、ガタゴト、ビュンとわき目もふらず突き進んでいきます。そんな急いでどこへ? 鮮やかな色使いとリズムカルな言葉が印象的です。



『パンダ銭湯』(絵本館)

パンダ以外の入店は固くお断り、というパンダのためのおふろやさんがあります。実はパンダには、隠さなければならぬ秘密があるのです。番台や簾で編んだ脱衣かごなど、銭湯のレトロな雰囲気も楽しめます。



原画展示絵本

春のギャラリーでは、パンダの知られざる秘密を明らかにした『パンダ銭湯』と、鮮やかな色使いが印象的な『タコさんトコトどこいくの?』の2冊をご紹介します。

tupera tupera先生に インタビュー



絵本作家になられたきっかけは?

“tupera tupera”は、そもそも雑貨のブランド名として名付け、布モノの雑貨制作を中心に二人で活動していました。パッチワークで作るかわいい絵柄が、絵本にむいているのでは?とお客さんに言われたり、同時期に外国の絵本を取り扱う書店さんと知り合ったり、絵本作家の五味太郎さんと仲良くなったりと、いくつかのきっかけが重なり、絵本を作りたい!という気持ちが強くなりました。

画材は何を使っていますか?

主に切り絵です。様々な紙を切って貼って絵作りにしています。ただ、絵本によっては、他の画材を使ったりもします。常に新しい方法にチャレンジして表現していきたいと思っています。

今回、絵本原画展を行う絵本の制作秘話や
思い出を教えてください。

『パンダ銭湯』
テレビで動物番組をぼんやり見ていたらパンダがでてきて、目が急にレイバン(サングラス)にみえました。目がサングラスという事は、服はチビT、足はスパッツ、耳は...と次々に妄想が膨らみ、その内に、みんなの人気者のパンダが、とてもうさん臭い生き物に思えてきました。となると、その正体を暴いて、みんなに知らせたい!脱がせたい!と思いました。脱ぐとなるとお風呂、そうだ、銭湯だ!と。

そこから、ラフを作り、銭湯の資料を集め、表現方法を試行錯誤し、ようやく絵本が完成しました。今回は、初めて背景を鉛筆で描いていて、その上にパンダを切り絵で作って貼っています。全部で100体ほどですが、未だにしばらくパンダは作りたくないなと思っています。

『タコさんトコトどこいくの?』

今7歳の娘が1歳になる頃に考えた絵本です。娘が立ったと思ったら、歩き始め、走り出し、ジャンプ!子供の成長の早さに驚く日々でした。成長の速度が止まらず、このままどんどん進んで他の惑星までいっちゃえば面白いの!と思って、この絵本を考えました。当初は娘が主人公で、当時娘をトコさんと呼んでいたのので、「トコさんトコトどこいくの?」というタイトルを考えましたが、進めるうちに、いつの間にか主人公はタコになってしまいました。

今まで手がけられた絵本の中で、一番印象
深い絵本は?

やはり最初の絵本『木がずらり』でしょうか。自ら印刷所を探し、時間をかけて、限定1000部で自費出版しました。絵本一冊ずつにナンバーを入れて、取引から流通まで全て自分達でやった経験が今のtupera tuperaの原点になっています。処女作ということもあり、特別な思い入れのある一冊です。

絵本をお作りになるときのこだわりは?

アイデアを最もよい形にするべく、絵の表現方法を考え、本の大きさや紙、デザインはど

うするか...など、一冊の本全てを自分達でディレクションしている事だと思います。

絵本を通じてお伝えになりたいことは?

特にありません。手に取った方それぞれが、自分らしく楽しんで頂ければと思います。

今後どのような絵本を描いていかれますか?

今後一冊ずつ実験的に作っていきたくと考えています。自分達自身、絵本を通して、新しい世界が広がっていったら嬉しいですね。

ご趣味についてお聞かせください。

(亀山) テニスとお酒です。

(中川) ファッションやインテリアに興味があります。

好きな言葉を教えてください。

(中川) 「ケセラセラ」です。

(亀山) 「ツペラツペラ」です。笑

ファンの皆さんへメッセージをお願いします。

絵本のみならず、作品は人が見たら楽しんで初めて初めて形になるものだと思います。私達の作品を通して、いろいろな出会いや、たくさんの笑顔が生まれれば、こんな嬉しい事はありません。これからもみなさんを驚かせる様なモノ作りをしていきたいと思っています。楽しみにして頂ければ嬉しいです。今後ともよろしく願います!

tupera tupera先生、ありがとうございました!



『タコさんトコトどこいくの?』
(絵本館)

tupera tupera先生 サイン入りの絵本を3名様に プレゼント

応募方法 氏名、年齢、住所、電話番号をご明記のうえ、ハガキでご応募ください。

あて先 〒939-0283 射水市鳥取50 射水市大島絵本館
tupera tupera サイン本プレゼント係
締め切り 平成28年4月10日 消印有効

※発表は発送をもって代えさせていただきます。

3/20(祝・日) 13:00~15:00

tupera tupera 絵本ライブ

参加費無料
入館料のみでご参加
いただけます!

tupera tuperaさんが来館されます。
読み聞かせとミニワークショップを楽しみましょう!
サイン会もあります。
先着80名(要申込)
詳細は絵本館までお問い合わせください。

特集 / 字のない絵本



魚瀬 ゆう子
前 富山県立図書館調査課長
富山県児童文学協会 副会長

絵本は語りかけてくる

幼い頃にもらった絵本の話です。姉には『ふしぎの国のアリス』、兄には『ピノキオ』、そして私には、スプーンとかコップとか物の数を数えるお勉強絵本。物語絵本をもらった姉達が羨ましくてたまりませんでした。

いずれもデザイン絵本で、「原作の世界観を無視して薄っぺらな作品にした」と評判が芳しくないことを、長じてから知りました。でも、当時の私にとっては、不思議な世界へ導いてくれる絵本。大きくなり過ぎてドアから突き出ているアリスの足や、チエシャ猫のにやにや笑い等、今でもありありと目に浮かびます。

でも、その後、絵本の記憶が途切れます。思うに、文字が読めるようになった私は、活字を辿れば物語世界を旅することができると知り、読む方に熱中したのでしょうか。絵本を手にしても、まず文章を読んで、それからようやく絵に目を向ける。そんな子どもだったようです。

絵本からすっかり遠ざかっていた大学時代、教養部から専門へ移行した年に、児童文学に詳しい講師が赴任されました。先生の研究室で、シュルヴィッツの『よあけ』や『あめのひ』を、初めて目にしました。湖のほとりに夜明けが近づき、生き物たちが目覚め始め、そし

て日が昇る。大事件が起きるわけでもなく、自然と人間の日々の営みを丹念に追っているだけなのです。でも、その奥に広がる世界を感じ取ることができ、絵本はここまで表現できるのかと、認識を新たにしました。

大学を卒業して図書館に勤めるようになると、世の中にはこんなに素晴らしい絵本がたくさんあったのだと、嬉しくなりました。バートンの『ちいさいおうち』、ボターの『ピーターラビット』など、名作と呼ばれる絵本はみんな、大人になってから読みました。

そして、安野光雅の『旅の絵本』や『ふしぎなえ』など、字のない絵本に出会います。一言の解説もなく、ただただ絵だけを手がかりに、描かれた世界に迫っていく。これは、大変わくわくする体験でした。

字のない絵本に触れたおかげで、その後は、字のある絵本でも、少しは絵を味わうことができるようになりました。岩崎ちひろが描く子供たちの眼差しからは、喜び・悲しみ・不安など切々と伝わってきます。

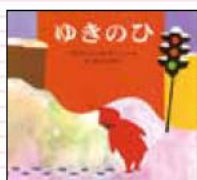
昔の作品であれ外国の作品であれ、絵本は、時間も空間も超えて豊かな世界に導いてくれます。そして、そんな絵本に出会わせてくれる絵本館や図書館へ通える幸せを、心から感謝します。

私のおすすめ絵本

『ゆきのひ』

エズラ・ジャック・キーツ／作
木島 始／訳
偕成社

小さい頃、雪が降ると、どうしてあんなに嬉しかったのだろう。主人公の少年と一緒に、雪の一日を思いっきり楽しむ絵本。



『アンジュール —ある犬の物語—』

ガブリエル・バンサン／作
ブックローン出版

走っている車から投げ捨てられた犬が、流浪した先に待っていたのは？ 一字もない白黒だけの世界で、孤独な魂同士の出会いを描き切る。



『もりのえほん』

安野光雅／絵
福音館書店

森に分け入り、じっと目を凝らす。細密な風景画の中から鳥や動物の姿を探すのは、大人でもワクワクする。



『戦争で死んだ 兵士のこと』

小泉吉宏／作
KADOKAWA

『ひとりの兵士が死んでいる』場面から時間を遡り、彼が誕生した時に至る。かけがえのない命を奪う戦争の愚かさを、静かに訴えてくる。



『戦火のなかの 子どもたち』

岩崎ちひろ／作
岩崎書店

ベトナム戦争に心を痛める、岩崎ちひろさんの最後の作品。子どもたちの眼差しが、胸に迫ってくる。



『よあけ』

ユリー・シュルヴィッツ／作
瀬田貞二／訳
福音館書店

何一つ動かない夜の湖は、夜明けが近づくにつれ、風や光で徐々に変化していく。日の出のシーンが実に感動的。

